

地域連携によるポリファーマシー対策

吉岡 陸展*

宝塚市立病院薬剤部

要 旨：近年，高齢患者におけるポリファーマシーは，国による医療政策や日本老年医学会によるガイドライン策定など各種団体の活動によって，広く認識されるようになったが，実際の医療現場における対応は容易ではない．ポリファーマシー対策が進まない要因として，疾患ごとに複数の診療科を受診する患者への薬物療法はかかりつけ医の重要な役割であること，他科や前医の処方薬への介入が消極的であること，専門外の治療薬の処方理由が判然とせず継続される傾向があるなどが挙げられる．日本の医療は病院完結型から地域完結型へ変化したが，地域連携の根幹である診療情報提供書によって，処方意図が十分に伝わっているとはいえない．入退院支援において，地域連携・多職種協働が重要視されるなか，ポリファーマシーに対する薬剤師の本質的な関わりについて解説する．入院から在宅に至るすべての臨床現場で薬剤師が提案し，医師が判断できる体制の構築が安心安全な薬物療法につながる．患者の望みを理解した上で，専門医の治療方針を包含し，最終的にはかかりつけ医による全人的な関わりと吟味によって，ポリファーマシーが是正できることが重要であると考えられる．

キーワード：地域連携，ポリファーマシー，薬剤情報提供書，多職種，超高齢社会

震災で学んだ、今後の薬局の取り組み

芦田 泰弦*

かんまき薬局グループ ABC 薬局

要 旨：平成 30 年 6 月 18 日、大阪北部大地震が発生し弊社は直撃を受けました。しかし薬局スタッフ、近隣クリニックのスタッフの方々、卸の方や薬局機器関連会社の方々など、様々な支えがあって、大きな混乱もなく営業することができました。日頃からの人と人のつながりがいかに大切かを再確認しました。改めて、薬局として、一薬剤師として、地域で何ができるのかを考えさせられました。弊社が重要と考えている、多職種連携や、地域の薬局としての取り組みは「人と人をつなぐ」役割を担うと考えております。弊社の取り組みを挙げると、以下のようになります。①地域包括や地域のボランティアの方々との連携として、「ABC にこここカフェ」という認知症カフェを月 1 回開催しております。②病院・クリニック・製薬会社・薬局の連携として、骨粗鬆症フォーラムを開催しています。地域での寝たきり患者を減らすことが目的のフォーラムであり、より顔の見える関係づくりを構築しております。③地域との関わりとして、出前講座、多職種・他業種との連携として市民講座を開催しています。多職種と共同でこうしたイベントに取り組むことは、地域の皆様のためではありますが、弊社スタッフにとっても、多職種との「話しやすい関係づくり」につながって、より地域に貢献できるものと考えています。④管理栄養士による在宅栄養訪問も始めています。弊社のこうした取り組みがますます認知され、地域の人々にとって、なくてはならない拠り所となれるよう、ますます精進したいと考えております。

キーワード：薬局の在り方、多職種連携、地域貢献、人と人をつなぐ

後発医薬品数量シェア 80%に向けての 保険薬局の取り組みと課題に関するアンケート調査

廣谷 芳彦*¹ 大竹 由起¹ 向井 淳治² 岡本 知佳¹
川須 菖¹ 川口 莉奈¹ 浦嶋 庸子¹ 池田 賢二¹

大阪大谷大学薬学部臨床薬剤学講座¹, 大阪大谷大学薬学部臨床薬学教育センター²

(受付：2018年5月10日 受理：2018年8月7日)

要 旨：平成28年度診療報酬改定により、後発医薬品(以下、後発品)数量シェアの基準が80%に引き上げられた。そのため、患者の薬剤費削減や保険薬局の業務負担軽減を図り、後発品のさらなる使用促進に対処する目的で本研究を行った。大学近隣の6薬剤師会会員の薬局を対象に、2017年3月1日から調査票を郵送した。232薬局中118薬局から回答を得た。後発品調剤体制加算1を取得している薬局は38.7%で、同加算2を取得した薬局は16.0%であった。回答薬局の一般名処方箋の割合は57.2%、一方、後発品の使用割合は64.0%で、変更不可の処方箋割合は12.3%であった。回答した118の薬局のうち、大部分の薬局は「後発品を積極的に勧めている」と回答(76.3%)したが、後発品への変更率は低かった。その主な要因は、患者への後発品の説明が不適切であると考えられる。76.3%の薬局が一般名処方の普及に賛成した。以上から、後発品数量シェア80%の要件として、一般名処方を原則とすることと、患者への適切な説明を行うことが必要とされた。

キーワード：後発医薬品, 保険薬局, アンケート, 後発品調剤体制加算, 一般名処方

薬局薬剤師が行っている相談対応および受診勧奨に関する実態調査

松浦 正佳^{*1,2} 村瀬 惇² 大鳥 徹² 岩城 正宏²

株式会社サエラ¹, 近畿大学薬学部²

(受付：2018年4月19日 受理：2018年6月7日)

要 旨：薬局薬剤師への相談の頻度や患者への受診勧奨の頻度を明らかにするために、薬剤師の属性に関する項目、勤務する薬局の属性に関する項目、患者からの相談・医療機関への受診勧奨に関する項目についてのアンケート調査を実施し、451人の薬剤師より回答を得た。直近6カ月間で患者からの相談を受けたことがあると回答した薬剤師は全体の94.7%であり、ほとんどの薬剤師が患者からの相談を受けていた。また、直近6カ月間で受診勧奨を行った経験があると回答した薬剤師は全体の85.1%であった。相談を受けた薬剤師については週当たりの勤務時間による相談件数の差はみられなかったが、受診勧奨については週当たりの勤務時間が20時間以上の薬剤師に件数が多い傾向がみられた。薬局薬剤師は患者からの相談を受け、その相談内容に応じて薬剤師が判断し受診勧奨を行っていることから、身近な相談者、かかりつけ薬剤師としての役割を果たしていることが示唆された。

キーワード：受診勧奨, 相談, アンケート調査, 薬局薬剤師

金属カチオン含有漢方エキス顆粒製剤とオフロキサシン同時懸濁時のキレート形成に関する基礎的検討

沼尻 幸彦¹ 鈴木 淳¹ 小林 正樹¹ 古地 壯光¹ 新津 勝¹ 秋山 滋男^{*2}

城西大学薬学部¹, 東京薬科大学薬学部薬学実務実習教育センター²

(受付: 2018年5月28日 受理: 2018年7月31日)

要 旨: カルシウムを含有する竜骨や牡蛎を生薬の成分として含む漢方薬である柴胡加竜骨牡蛎湯エキス顆粒製剤, 桂枝加竜骨牡蛎湯エキス顆粒製剤とキノロン系抗菌剤であるオフロキサシンとの相互作用について, 患者へ投薬する際の同時懸濁の条件下において検討を行った. 対象となる漢方薬とオフロキサシンを同時懸濁 10 分後, 60 分後, 120 分後にクロロホルムを使用して抽出し, オフロキサシンの未変化体の濃度を測定した. その結果, これらの漢方薬とオフロキサシンとの同時懸濁で, オフロキサシンの未変化体の濃度の低下が認められた. これは, オフロキサシンがこれらの漢方薬に含まれるカルシウムとキレートを形成したことによるものと示唆された. カルシウムを含有している竜骨, 牡蛎等を生薬の成分として含む漢方薬は, キノロン系抗菌剤とキレートを形成することによって薬物間相互作用を引き起こし, 抗菌効果が低下することが示唆された.

キーワード: オフロキサシン, 漢方薬, 竜骨, 牡蛎, カルシウム, マグネシウム